



ミニでの
目標・課題

- 身の回りのユニバーサルデザインを探し、その製品の特徴や、どのような工夫が盛り込まれているかを調べ、イラストや文章でまとめよう。
- 身の回りの「もっと〇〇だったらいいな」と思うものを挙げよう。



もっと
GO!
GO!



聞いてみよう

生活用品や、まちの中の施設・設備などの多くは、右利き用に作られている。身近な左利きの人に、日常生活で使いにくい道具や、ストレスを感じる場面がないか聞いてみよう。



発表してみよう

グループで誰もが使いやすい商品を考え、企画書にまとめ、企業に提案してみよう。

1 比べてみよう ビフォー・アフター



1 自動ドア

両手に荷物を持っていたり、障がいなどでドアノブを持ちにくかったりしても、出入りがしやすい。



2 センサーライト

スイッチの位置が暗闇で見つけられなかったり、子どもの手の届かないところにあったりしても、人の動きを感知してライトがつく。



3 センサー式蛇口

両手に石けんをつけたあとでも、ひねる動作がしにくい子どもや高齢者でも、手を差し出すだけで水を出したり止めたりすることができる。



4 投入口の大きい自動販売機

手の不自由な人や、急いでいる人でも、硬貨を投入しやすい。



5 シャンプー容器のギザギザ

目をつぶった状態でも、目の不自由な人でも、シャンプーとリンスの違いがわかりやすい。



6 ペットボトルの形

握りやすさを考えたくぼみがあり、力の弱い人でも、結露でボトルが濡れている時でも、持ちやすく、注ぎやすい。



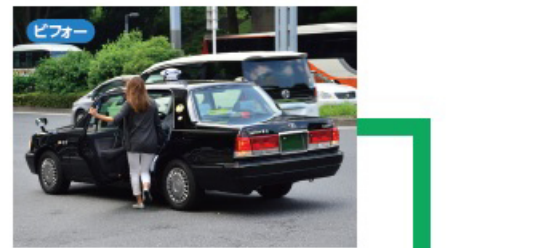
7 ピクトグラム

日本語を読めない海外の人や子どもでも、図を見ることで、示している意味がわかる。



8 お掃除ロボット

忙しい人でも、掃除をすることが大変な人でも、スイッチを入れておくだけで部屋の掃除ができる。



9 ユニバーサルデザインタクシー

ゆったりした車内空間、スロープや手すりなどをつけた乗降口を確保。高齢者や妊婦、ベビーカーを使う人、荷物の多い人にも乗りやすく、車いすのままでも乗車することができる。ゆったりと乗れるのに、普通のタクシーと同じ料金で、誰もが利用できる。

高齢者・共生

ユニバーサルデザインの考え方

ユニバーサルデザインの考え方は、1980年代に、アメリカのノースカロライナ州立大学の教授であったロナルド・メイス氏によって提唱された。自分自身も障がいをもっていたメイス氏は、特別扱いされることを嫌い、またバリアフリーのために作られた製品は価格も高く、見た目も特別なものになりやすいため、最初からできるだけ多くの人に使いやすいデザインが必要であると考えた。当初、建築や設備から始まったユニバーサルデザインの考え方は次第に広がっていき、2006年に国連総会において採択された「障害者の権利に関する条約」では、「調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲ですべての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう。」と定義されている。

身の回りの製品を、ユニバーサルデザインの視点でもう一度見直してみよう。当たり前と思っていたものから、多くの人が使いやすい新しいアイデアがわいてくるかもしれない。



ロナルド・メイス (1941~1998年)